

# 日本政治学会 会報

## The JPSSA News

No.6

October 1983

### 石川啄木と〈社会主義的帝国主義〉

信 夫 清 三 郎

新刊の年報に岡利郎氏が寄稿した労作『明治日本の「社会帝国主義」、山路愛山の国家像』は、私に晩年の石川啄木が口にしたという〈社会主義的帝国主義〉を思い起させた。

病弱な啄木に物心の援助を惜しまなかった金田一京助は、明治44年夏のころ、啄木が杖で自分を支えながら〈此世で人を訪問した最後であったらう〉と思う訪問をしてくれ、啄木から〈思想上の一転期に立ってゐる〉という告白をうけたときのことを回想した。訪問の時期は、〈四十四年の夏から秋へかけての事〉ともいい、〈飛白の単衣を着て見えたかと思ふので、もう七月にはひったのではなかったかと思ふが、それともさうまだ暑くならない六月内であったらうか〉ともいうが、啄木は、〈幸徳一派の考には重大な過誤があることを今明白に知った〉と語りながら、〈今の僕の懐くこんな思想は何と呼ぶべきものだから自分にもまだ解らないが、〈こんな正反対な語を連ねたら笑ふかも知れないが——社会主義的帝国主義ですなあ〉といったのであった。耳を傾けていた金田一は、〈病床に危坐して火を吐くやうに現代の社会を呪詛した口から涙ぐましく一切の現実を此の眞肯定しようとする血の出る様な言葉が響いた〉と感じたが、金田一は、それから十数年を経た昭和2年1月号の『改造』に啄木の告白を発表し、荒畑寒村氏に〈啄木晩年の思想に永遠の謎を投じたものだ〉といわせた（金田一京助、終篇石川啄木、改訂増補版、1967年）。啄木は、大逆事件の本質を知って〈社会主義〉にめざめ、判決と死刑執行後の明治44年6月15日、『はてしなき議論の後』をやるして〈‘V Narod!’と叫び出づるものなし〉と詠じた。彼自身は、〈平民の中へ行〉くために土岐善磨と文学雑誌『樹木と果実』の発行を計画し、〈現代生活の諸方面に涉って、真面目に考察したい、大

胆に批判したい、また新しい理解の上に立って、歌をつくらうと思ひながら、〈しよっちゅうマッチを擦っては青年の燃えやすい心に投げてやらう〉と希望を燃え立たせた。しかし、啄木の病状は悪化し、家庭の乱れがかさなり、そのうえ『樹木と果実』の発刊も印刷所のことで断念しなければならなくなった。啄木は、みずから陥った〈閉塞〉状況からの出口を〈社会主義的帝国主義〉に求めたのであったか？

しかし、啄木は年初からの思想のいとなみをつづけ社会主義的帝国主義を告白したというあとでもしきりにクロボトキンを読み、明治44年11月には辛亥革命勃発の報に接して〈朝々新聞を読む度に、支那に行きたくなりませう、さうして支那に行きさへすれば、病氣などはすぐ直つてしまふやうな気がします〉とするし、明治44年の大晦日から明治45年元旦にかけて東京市内電車の運転手と車掌が決行したストライキには〈何だかそれが、保守主義者の好かない事のどんでん日本に起つて来る前兆のやうで、私の頭は久し振りに一しきり急がしかった〉とするして〈オールド・ニッポン〉の危機を予測し、明治45年の正月を〈東京の人々がストライキの中に迎へたといふ、何だか不思議な使命を持って来たやうな、暗示的な新年〉と表現し、新しい時代がおとずれてくるのを期待して〈おとなしい日本の青年の口から、その男らしい宣言の語られる日を待てる〉と述べた。そしてその4月13日、啄木は青年の宣言を聞くこともなく28年の生涯を終えた。

しからば、啄木の〈社会主義的帝国主義〉とは何だったのであろうか？ 啄木は、おそらく〈幸徳一派の考〉とみなした〈無政府主義〉を〈最後の理想〉とみとめ、〈實際家〉としての自分がいま心がけるべきものは〈国家社会主義〉であると強調し、〈国家社会主義〉をある

西川知一会員

次期理事長に選出される

10月8日、早稲田大学で開かれた次期理事会において、西川知一が満場一致で次期理事長に選出された。西川次期理事は、来年度の総会終了後から2年間、理事長を務めることになる。また西川次期理事長は、犬童一男会員（神戸大）を次期常務理事に指名し、9日に開かれた臨時総会で承認を得た。

これに先立ち、次期理事のうち会員からの直接選挙によって選ばれる候補者を決める選挙は、6月30日締めきられ、開票の結果、下記の会員が当選した。なお、選挙管理委員会から発表された今回の選挙の主なデータは次の通りである。

一 有権者総数	814名
二 投票者総数	396名
三 期限内有効返信用封筒数	394通
四 有効投票用紙数	393通
五 三〇票以上の得票者	34名
六 上位第二〇位の得票数	40票
七 第一位の得票数	112票

また、1983年9月10日、都立大学で開かれた次期公選理事候補者による推薦理事候補者選考委員会の結果をふまえ、理事長が各候補者と交渉した結果、新たに下記の15名の会員を推薦理事候補として総会の承認を求めることに決まり、先の公選理事候補者の中、2名の辞退者（内山秀夫、高島通敏）を除く18名と合せて、10月8日の総会で次期理事（1984.10—1986.10）として承認された。次期理事に決まった会員の氏名は、以下の通りである。

阿部四郎（東北大学）  
阿部 齊（筑波大学）

荒木俊夫（北海道大学）  
☆有賀 弘（東京大学）  
☆飯坂良明（学習院大学）  
井田輝敏（北九州大学）  
☆今中比呂志（広島大学）  
☆内田 満（早稲田大学）  
☆岡本 宏（熊本大学）  
川口 浩（成蹊大学）  
☆小林丈児（中央大学）  
島袋 邦（琉球大学）  
鈴木 寛（金沢大学）  
☆田北亮介（竜谷大学）  
☆田口富久治（名古屋大学）  
☆田中 浩（一ツ橋大学）  
☆富田信男（明治大学）  
☆西川知一（神戸大学）  
野村浩一（立教大学）  
半沢孝麿（東京都立大学）  
☆福井英雄（立命館大学）  
☆堀江 湛（慶応義塾大学）  
☆増島 宏（法政大学）  
☆松下圭一（法政大学）  
三沢潤生（埼玉大学）  
三谷 太一郎（東京大学）  
☆三宅一郎（同志社大学）  
武者小路公秀（上智大学）  
森田 勉（三重大学）  
矢野 暢（京都大学）  
山川雄巳（関西大学）  
☆山口 定（大阪市立大学）  
☆安 世舟（大東文化大学）

☆印は公選理事候補 以上

（前頁からつづく）

ときは〈社会主義的国家主義〉とも表現していたが、金田一に語ったという〈社会主義的帝国主義〉は、啄木が〈社会主義的国家主義〉をいまちがえたものであったろうか？あるいは、金田一が聞きまちがえるか、記憶ちがいをしたのであろうか？ そうでなくてやはり〈社

会主義的帝国主義〉だったのであろうか？ そうとすれば、啄木の死にいたるまでの思想展開のなかで〈社会主義的帝国主義〉はどういう位地に立つのであろうか？啄木の過去の文章のなかで〈社会主義的帝国主義〉に通じるような何かがあったのであろうか？ それとも〈永遠の謎〉なのであろうか？

1983年度研究会・総会

早稲田大学で開催される

1983年度の研究会は、10月8(土)、9(日)の両日、東京・高田馬場の早稲田大学で開催された。300名を超える会員の参加をえて、研究会は下記のプログラム通り順調に終了した。

第一日午後1時30分より開かれた総会においては、司会の内田満会員の開会の辞に続いて升味理事長の挨拶があり、更に企画、年報、渉外、文献、選管の各委員会委員長の報告がなされた。また佐々木監事より1982年度決算、半沢常務理事より1983年度予算(いずれも前号会報に掲載)がそれぞれ報告された。また升味理事長より次期監事として田中治男会員の推薦があり、承認された。最後に、学術会議問題の現状について、岡倉古志郎会員より報告された。また研究会第一日の終了後、大隈会館において懇親会が開かれ、150名を超える会員の参加の下、吉村会員の歓迎の辞、升味理事長の挨拶、堀豊彦会員の乾杯の辞にはじまって盛況の中に行われた。

なお、研究会のプログラムは下記の通りである。

第1日 10月8日(土)

**共通論題A 社会民主主義の実験**

司会 高橋彦博氏(法政大学)

報告 熊沢誠氏(甲南大学)

「イギリス—労働党政権の実験」

山本佐門氏(北海学園大学)

「ドイツ社会民主党政権の実験」

木下威氏(鹿児島大学)

「片山内閣の実験」

討論 北西允氏(広島大学)

河上民雄氏(東海大学)

**分科会A 比例代表制の理論と実際**

司会 水崎節文氏(岐阜大学)

報告 西平重喜氏(上智大学)

「理論上、歴史からみた比例代表制の問題点」

小林良彰氏(慶応大学)

「参院選をめぐる政党支持状況」

討論 徳本正彦氏(九州大学)

福岡政行氏(駒沢大学)

G. Hierscher 氏(南ドイツ新聞)

**分科会B 国家体制再編成期における集権と分権**

司会 赤木須留喜氏(東京都立大学)

報告 北住炯一氏(愛知学院大学)

「ドイツ第二帝制・プロイセン地方自治制にお

ける『国家と社会』

野地孝一氏(信州大学)

「ミッテラン政権と分権改革」

討論 山田公平氏(名古屋大学)

大原光憲氏(中央大学)

**分科会C フランクフルト学派の政治思想**

司会 清水多吉氏(立正大学)

報告 谷喬夫氏(日本福祉大学)

「ホルクハイマー、アドルノの政治哲学」

山本啓氏(秋田大学)

「ハーバースの正当性概念」

討論 姜尚中氏(明治学院大学)

波平恒男氏(琉球大学)

第2日 10月9日(日)

**共通論題B 社会主義国家における政治指導**

司会 溪内謙氏(東京大学)

報告 内田健二氏(東京大学)

「スターリンの政治指導」

報告 皆川修吾氏(南山大学)

「ブレジネフの指導体制」

木戸薺氏(神戸大学)

「東欧諸国における政治指導」

討論 池庄司敬信氏(中央大学)

吉川元氏(広島修道大学)

**分科会D**

**ヘルマン・ヘラーとワイマール・デモクラシー**

司会 山口利男氏(名古屋大学)

報告 斎藤誠氏(東北学院大学)

「ヘルマン・ヘラーとヴァイマル民主制」

安世舟氏(大東文化大学)

「ヘルマン・ヘラーの国家論」

討論 新田邦夫氏(山梨大学)

田中浩氏(一橋大学)

**分科会E 戦中・戦後の運動と体制**

司会 今井清一氏(横浜国立大学)

報告 林由美氏(東京大学)

「社会大衆党の戦中と戦後」

雨宮昭一氏(茨城大学)

「市町村の戦中戦後」

討論 吉見義昭氏(中央大学)

山室健徳氏(東京大学)

**分科会F 予算・行政改革・政治**

司会 村松岐夫氏(京都大学)

報告 穴見明氏(名古屋大学)

「70年代アメリカ予算政治の動向」  
 眞 瀨 勝氏(大阪大学)  
 「ジミー・カーターの行政改革」

討論 加藤 一明氏(関西学院大学)  
 小島 昭氏(法政大学)

## 年報政治学

### 『近代日本の国家像』刊行される

1982年度の日本政治学会年報(年報委員長・松本三之介)は、9月30日発刊された。その主な内容は以下の通りである。

#### 近代日本の国家像 (岩波書店刊, 3,600円)

- 序論 天皇制国家像の一断面 松本三之介  
 ——若干の思想史的整理について——
- I 自由民権期の国家像 比屋根 照夫  
 ——末広鉄腸の政治思想——
- II 岡倉天心の面影 橋川文三
- III 「亡国」の思想——田中正造 五十嵐 暁郎
- IV 「平民主義」から「自由帝国主義」へ  
 ——竹越三叉の政治思想—— 西田 毅
- V 明治日本の「社会帝国主義」 岡 利郎  
 ——山路愛山の国家像——
- VI ある大正デモクラットの民衆 和田 守  
 政治論とファシズムへの抵抗  
 ——馬場恒吾の言論活動を通して——
- VII 批判の航跡 飯田 泰三  
 ——長谷川如是閑——
- VIII 郷の立替え立直し——出口王 栗原 彬  
 仁三郎
- IX 十五年戦争下の石橋湛山 松尾 尊兌  
 文献リスト——1981年—— 日本政治学会  
 文献委員会

#### 学会報告

日本政治学会年録 日本政治学会事務局

### I P S A ニ ュ ー ス

## 第13回 I P S A 世界大会

第13回 I P S A 世界大会は1985年7月15—20日にパリにおいて開かれますが、下記のような主題、副主題、部会が予定されています。各部会にはそれぞれ企画担当者が指名されており、各4～6名の研究発表者を選ぶことになっています。

日本政治学会会員で、研究報告を希望される方は、部会名と報告内容要約を事務局あて早急に御送付頂ければ、関係部会の企画担当者に連絡します。

#### 記

主題：国家の変容——国内社会の国際社会との関連において

#### 副主題1 現代政治理論における国家と政府

- 部会 1.1 国家に関する論争の総括
- 〃 1.2 国家権威の正当化の諸類型
  - 〃 1.3 社会主義国における国家：その理論的分析
  - 〃 1.4 発展途上国における国家：その理論的分析
  - 〃 1.5 新世界秩序の概念と国
  - 〃 1.6 近代国家分析の方法論
  - 〃 1.7 政府の性格と機能に関するマルクス主義、自由主義、保守主義の諸学説
  - 〃 1.8 新しい政治経済における国家の概念

#### 副主題2 政府機構の構造変容

- 部会 2.1 公共官僚制とその近代社会における役割
- 〃 2.2 政府機構の変容と社会科学者の影響
  - 〃 2.3 発展途上社会における公共官僚制
  - 〃 2.4 中心と周辺との関係の変容
  - 〃 2.5 政府制度の変容と公私セクター間の連繋
  - 〃 2.6 選挙の「移り気」性(volatility)と政党の統制：国家にとっての問題として
  - 〃 2.7 政府の諸活動に対する市民参加と社会運動の影響
  - 〃 2.8 マス・メディアと近代国家：新しいコミュニケーション問題

#### 副主題3 公共政策と政府活動の比較

- 部会 3.1 政府の構造と公共成長の動態
- 〃 3.2 計画と政府規制の限界
  - 〃 3.3 政策の実施と評価
  - 〃 3.4 拡張立法(extended legislation)の過程とその範囲
  - 〃 3.5 福祉国家の展望
  - 〃 3.6 公共配分の諸パターン
  - 〃 3.7 国内政策と国際行為主体
  - 〃 3.8 比較公共政策研究の方法論
  - 〃 3.9 社会政策の比較

#### 副主題4 国家の直面する諸問題

- 部会 4.1 全地球的平和と安全の前提：軍縮・軍備規制と行動規範
- 〃 4.2 全地球的管理の諸争点：国際社会の変容過程

- 部会 4.3 国家と国際統合：地域協力の可能性と限界
- ＊ 4.4 非同盟など非核諸国の安全保障政策
  - ＊ 4.5 資源をめぐる紛争と勢力圏：地球学は再登場するか
  - ＊ 4.6 紛争管理の新しい形態
  - ＊ 4.7 全地球的な経済危機と国家政策：自律・従属・協力の諸争点

なお、IPSAでは現在個人会員を募集しています。御希望の方は学会事務局までお問合せ下さい。

### 理 事 会 記 録 か ら

#### ◎1983年度第一回理事会

(1983年6月25日、京大会館)

[報告事項]

1. 84年度企画委員会(有賀)  
有賀委員長より次のような報告があり了承された。
  - (1) 6月18、25日、それぞれ東京、京都で第一回企画委員会を開催し、委員会の構成を確定した。
  - (2) 委員を次の会員に委嘱した。阿部四郎、犬童一男、内田 満、内山秀夫、岡村忠夫、木坂順一郎、木村雅昭、鷺見誠一、高柳先男、田中治男、徳本正彦、中邨 章、坂野潤治、宮村治雄。
  - (3) 企画については、共通論題(A)政党政治、(B)大正デモクラシーの再検討を予定し、部会として理論、政治史、政治思想史に行政学、国際政治を加えて合計6つを予定している。

なお、10月をめどにしてプランを作成中である。

2. IPSA基金運営について(半沢)  
渉外委員会より、基金運営委員会に次のような申入れがあった。今年9月に執行委員会付きのR. T. がイリノイ大学で開かれ、武者小路委員長と共に、アメリカ滞在中の阿部委員の出席を予定しているが、についてはアメリカ国内における阿部氏の旅費(ワシントン、シカゴ間400ドル)の支出を希望する。  
運営委員会としては、規程および現在の基金の果実の状況と、申出の趣旨に鑑み支出していいと判断したが規程にしたがって理事会の承認を得たい。以上の申出が半沢理事よりありその通り承認した。

#### ◎1983年度第二回理事会

(1983年10月8日・大隈会館)

[報告事項]

1. 企画委員会(有賀)  
来年度研究会の企画について、共通論題として「政

党制再編の理論と実際」、「大正デモクラシーの再検討」、分科会テーマとして「連邦制の再検討」「政策過程と官僚制」「イタリア・ファシズムの成立」「“新冷戦”と世界の軍事化」「ヨーロッパ・モデルとロシア、中国」「明治後半期の政治思想」を予定している旨、報告があり、了承された。

#### 2. 文献委員会(福井)

1984年度文献委員を形野清貴、川端正久、菊井礼次久保山和人、豊下楯彦、中谷猛、橋本信之、松田博、宮本盛太郎の各会員に委嘱する旨、報告があり、了承された。

[協議事項]

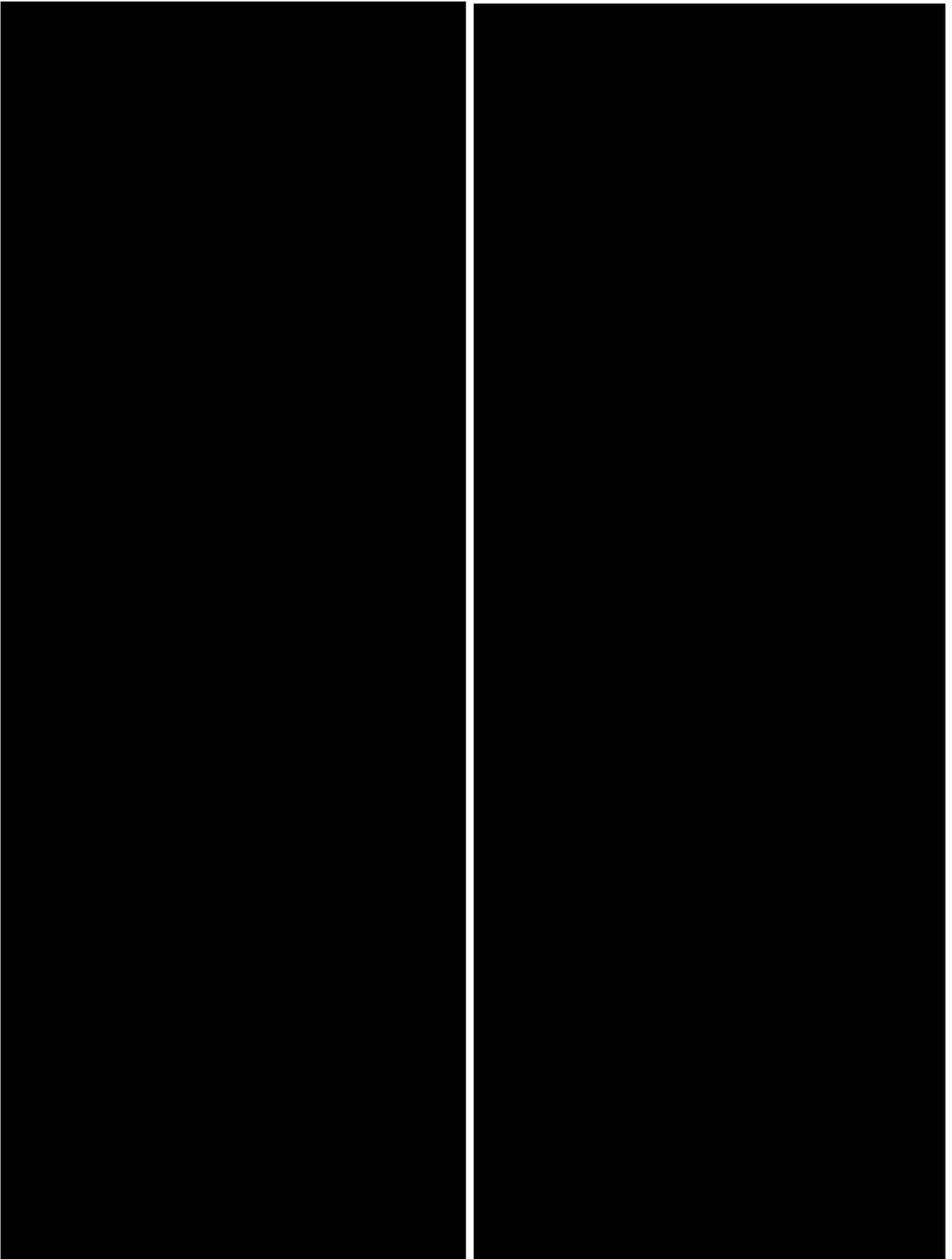
#### 1. 学術会議科研費配分審査委員候補の件

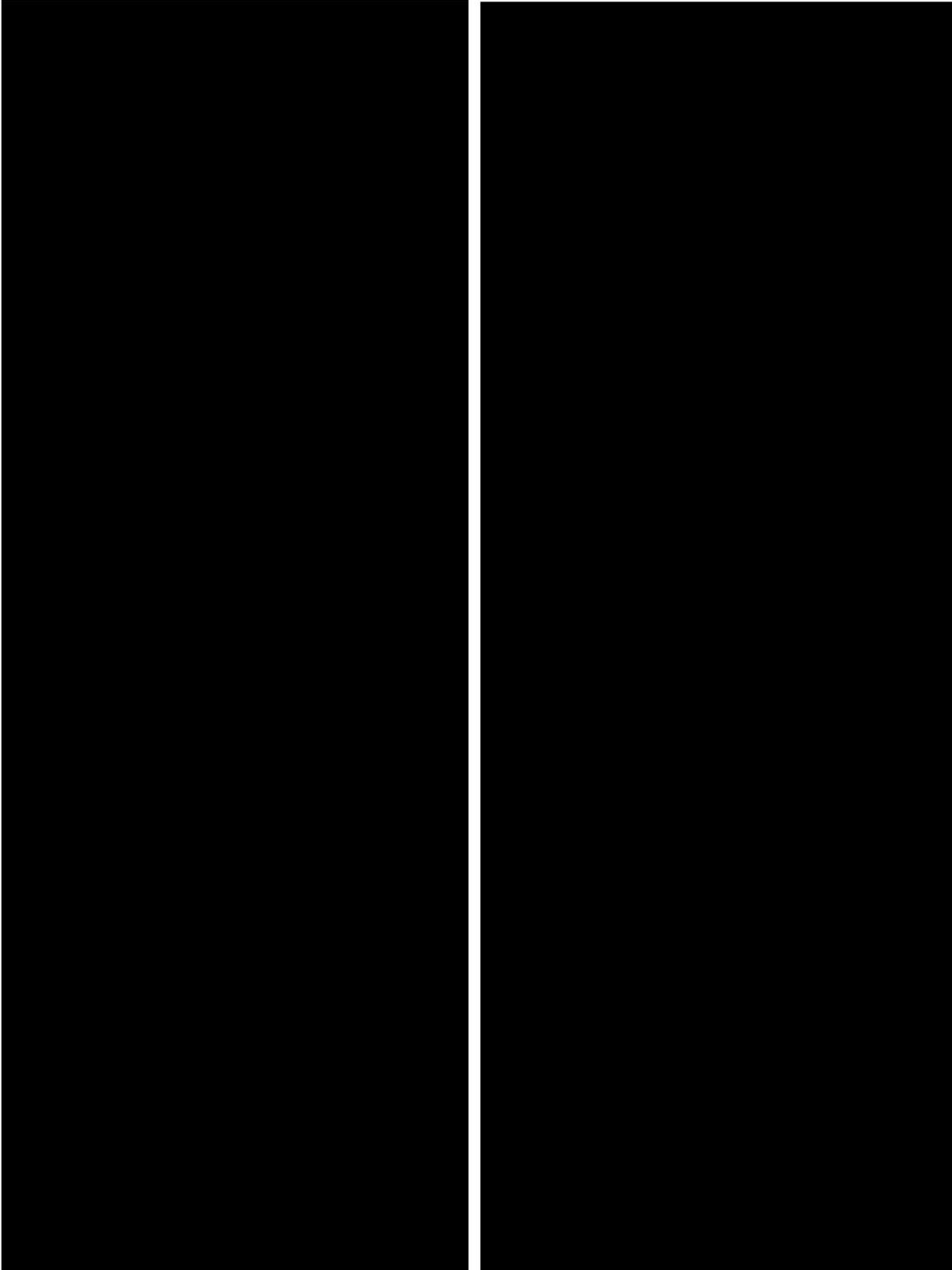
学術会議から依頼のあった科研費配分審査委員候補の推薦について、従来の例にしたがい、企画委員長をあてることにし、田口富久治、有賀弘(順位指定なし)の両会員を推薦することに決定した。

#### 2. 監事推薦の件

佐々木毅監事の任期満了に伴い、次期監事候補として田中治男会員を総会に推薦することに決定した。

### 会 員 の 異 動





事 務 局 か ら

事務局は毎週火、木曜日を仕事日としています。御連絡は、火、木曜日をお願いします。

1983年10月31日

編集 日本政治学会会報編集委員会  
(代表 半 沢 孝 麿)

発行 日本政治学会事務局  
〒152 東京都目黒区八雲 1-1-1  
東京 都立大学法学研究室  
TEL (03) 717-0111